

# 1954年開館 子供博物館

外間 一先

The Children's Museum opened in 1954

Kazuyuki HOKAMA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第16号別刷

2023年3月15日

Reprinted from the  
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.16  
March, 2023

## 1954年開館 子供博物館

外間 一先<sup>1)</sup>

The Children's Museum opened in 1954

Kazuyuki HOKAMA<sup>1)</sup>

Abstract

In December 10<sup>th</sup>, 1954, the Children's Museum was opened by in Makishi, Naha City.

At the opening ceremony, Mr. Kasuke Amano, who served as the museum's first director, expressed his expectation that "the Children's Museum is an educational facility, a cultural facility, and a permanent welfare promotion facility that will create a new history in Okinawa and provide to our cute children."

Okinawa experienced fierce ground battles, and at a time the Children's Museum was built when the second of war was still remaining. The total construction cost of it 1.91 million yen. In 1952, the construction concept was finalized, but due to lack of funds, construction could not start, but the Children's Museum was realized with the support of the Okinawa Kenjinkai in Peru, South America.

Unfortunately, the Children's Museum no longer exists. It closed on June 30<sup>th</sup>, 1966, 12 years after its opening. The facility continued as the "PTA Kaikan", and the function of the children's museum was taken over by the Okinawa Boys' Hall (demolished in 2012) that opened in Kumoji, Naha City. The site where the Children's Museum is now located has been redeveloped into Midorigaoka Park.

はじめに

那覇市牧志に子供博物館が開館したのは1954年12月10日のことだった。

初代館長を務めた天野鍛助氏は開館時の式辞で「子供博物館は、沖縄の新しい歴史を作っていく、私たちの可愛い子どもたちに提供する教育施設であり、文化施設であり、恒久的福祉増進施設であります」と期待を込めたのだった。(写真1)

苛烈な地上戦を経験した沖縄において、まだまだ戦争の傷痕が生々しく残っている時代に、建設総経費191万円の資金を投入して子供博物館は完成した。1952(昭和27)年に建設構想がまとまるが、資金不足で計画通りに進まず着工は遅れていたところ、南米ペルーの沖縄県人会からの援助で子供博物館は実現した。1)

しかし残念ながら、子供博物館は現存していない。開館から12年後の1966年6月30日に閉鎖。施設は「PTA会館」として存続し、子供博物館の機能は、

那覇市久茂地にオープンした沖縄少年会館(2012年取壊)に引き継がれた。現在、子供博物館が立地していた場所は再開発され緑ヶ丘公園となっている。

### 1. 沖縄PTA連合会 1952(昭和27)年3月

子供博物館の建設を計画したのは沖縄PTA連合会(現:一般社団法人沖縄県PTA連合会)だった。沖縄PTA連合会は、1947(昭和22)年12月10日に沖縄教育後援連合会として誕生した。戦後の沖縄で、各学校に存在した学校後援会をまとめる役割を担っていた。1950年ごろから各学校でPTA設立の動きが高まり、同会は1953(昭和28)年に改組し沖縄PTA連合会として事業を続けた。2)

沖縄PTA連合会は、1952年3月の総会において子供博物館建設の件を議決している。それは沖縄PTA連合会の発足五周年記念事業としての取組だった。その建設資金について、52年当初の見積額は総額350万円であった。予算の内訳は各地区PTA

<sup>1)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1  
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1. Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

の負担金が100万円、街頭募金額100万円、政府補助金及び寄附金100万円、海外からの寄附金50万円を見込んでいた。しかし同年5月に沖縄PTA連合会役員に専門家を加えた研究準備委員会で予算、施設、敷地等について検討したところ、各地区PTAの負担金100万円が過重であると理由で当初案が棚上げ状態となったのであった。

そのような中、翌6月に建設資金の件で、海外からの寄附金を活用するという案で、計画が再び前進した。ペルー沖繩人協会（現：ペルー沖繩県人会）が琉球政府に寄贈した121万円を建設資金にすることで予算のめどが立ったのであった。内訳は次のとおりである。ペルー寄附金121万円、福祉協議会の配分金60万円、地区PTA負担金10万円の総額191万円というものであった。

写真1 子供博物館 外観



写真：沖縄県立博物館・美術館

## 2. ペルー沖繩移民

ペルー共和国は南米大陸中西部に位置し、面積128万5千km<sup>2</sup>の太平洋沿いに面した南北に広がる国である。首都はリマ、主要言語はスペイン語、ケチュア語、アイマラ語である。

日本からの移民は1898年に始まった。契約移民を許可するペルー大統領令の公布があり、「森岡商会」という渡航代理店が募集した移民790人が1899（明治32）年にリマ市郊外にあるカヤオ港に上陸したのであった。3）

沖縄からの移民は、第1回契約移民から7年後の1906（明治39）年に36人から始まった。以後、沖縄からは17年間で3,694人を送り出した。ペルー移民の歴史はハワイの次に古く、当初はサトウキビや綿

花のプランテーションの契約移民として、過酷な労働に従事していた。当時のペルーは封建的大地主制度下であって、労働者が土地を求めて独立することは、容易ではなかった。そのため移民は契約期間後には都市部へ移動するようになり雑貨店や飲食店、理髪店など商業を営む人が増えた。その中には多くの沖縄移民が含まれていた。4）

沖縄戦で灰燼に帰した故郷の復興の手助けをしようと、布哇（ハワイ）連合沖縄救済会が寄附金を募り、繁殖用の豚550頭を沖縄に送ったことは有名である。ペルーでも秘露（ペルー）沖縄救援連盟会が結成され、救援活動に取り組んだ。北米のララ（アジア救済連盟）を通じて医薬品や衣料品、食料品など多額の救援物資を送っている。5）

## 3. 子供博物館建設への道のり

ペルー沖繩人協会からの寄附金121万円を建設資金にすることで、子供博物館建設は再び動き出すのであった。しかし、次は建設用地の選定に時間を要することになる。また、その間に福祉協議会の配分金が予定していた60万円から24万円に減額されてしまう。予算案を再び見直すことにもなり、計画は1953年へとずれ込んでいくのであった。

1953年5月に開催した沖縄PTA連合会の総会では建設用地について話し合いが行われた。そこでは那覇市が予定している「子供センター」建設用地について言及している。立地条件として交通の便が良く、全島から集まりやすい便利な場所であることと静かで見晴らしのいい最適な場所であるとして那覇市久茂地の高台（現：緑ヶ丘公園）に建設することで那覇市と折衝するという計画を立てたのであった。

沖縄PTA連合会は、那覇市と具体的な折衝を開始する。那覇市の都市計画課が「子供センター」予定地の地主約50人を収集し、子供博物館建設のための敷地提供と換地について説明を行い、ほどなくして地主から賛同を得ることとなる。

また建設費に関しても1953年7月に開催した沖縄PTA連合会総会で183万円が議決された。その内訳はペルー寄附金121万円、同寄附金利子13万円、赤い羽根共同募金配分24万円、PTA負担金10万円、事業収益金15万円であった。

同年10月、工事請負業者は入札の結果、那覇港ターミナルビル施工の実績を持つ金城カンパニーが140万円で落札し、11月に着工した。工事は順調に進み、翌年の1954年2月には予定通り2階部分のコンクリート打設を行った。ところが、工事を請け負っていた金城田助氏が突然死去したために、工事が一時中断してしまう。さらにトイレ等の追加工事もあり工期は延長を余儀なくされた。子供博物館の建設が起案されてから、実に2年半の時間をかけて竣工したのは1954年9月であった。

子供博物館は延105坪のブロックコンクリート2階建てで、設計は仲座久雄氏だった。1階に展示室、事務室等を配置し、2階には映写室の設備がついた集会及び展示室兼用のホールになっていた。(写真2)

写真2 子供博物館 二階ホール



写真：沖縄県 PTA 連合会

#### 4. 子供博物館開会式と新聞報道

子供博物館はペルー沖繩人協会からの寄附金121万円（利子を含めると134万円）を主財源にして建設が実現した。那覇市久茂地の高台に完成した子供博物館は「ペルー館」という別名を持ち、その近未来的なデザインの施設は、まさに輝かしく屹立していたのである。

沖縄PTA連合会は竣工とともに開館準備にとりかかり1956年10月開催の総会で施設充実費を用意した。さらに那覇市や真和志市からも補助を仰ぎ、学校募金や篤志家からの協力をいただいて展示を行った。開会式は沖縄PTA連合会の結成七周年記念の日（1954年12月10日）に実施した。当時の新聞記録を以下に示す。

●沖縄タイムス 1954年12月11日付（抜粋）

「すらの夢ここに実現 子供博物館盛大な開会式」

沖縄PTA連合会が全琉14万学童に贈る子供博物館は2か年の才月を要して、このほど那覇市久茂地の高台に完成、PTA連合会七周年にあたる十日ひる二時半から新装なった同館二階ホールでハークネス民政府情報教育部長代理、仲井間上訴裁主席判事、長嶺立法院副議長、真栄田文教局長（主席代理）、屋良教職員会々長ほか小中高生徒代表二百五十名を迎えて盛大に開会式を行った。(写真3)

式はPTA連合会安村主事の経過報告にはじまり、ついで天野PTA連合会長から「理想的な博物館には前途なお遠いが、全琉学童生徒のため十萬PTAの力を結集し、その表現を期すべく努力を払う決意があります」と力強いあいさつがあり、これに答えて全島小中校生徒代表の一人として開南小学校六年生吉田龍亮君から「私が長い間待ちかねていた子供博物館が青空にくつきりとスマートな姿を浮かせて見事にでき上がりました。いままでいろいろな建物ができましたが、私達子供の為につくられた建物がなくて淋しい思いをしていましたが、今このような立派な建物を私達におくられたPTA連合会や先生方に心から御礼を申し上げ、その御恩に報いるためにしつかり勉強いたします」とよろこびと感謝の辞が述べられた。

このあと、博物館建設に協力し、児童文化の向上のために、尽力したペルー沖繩人協会（代表嘉手納知通）沖縄社会福祉協議会、オリオン興行株式会社、国場組映画部、古堅兄弟社の五団体並に湧川善公、山元旭錦、南条みよし、の三氏に対してそれぞれ感謝状が贈呈された。

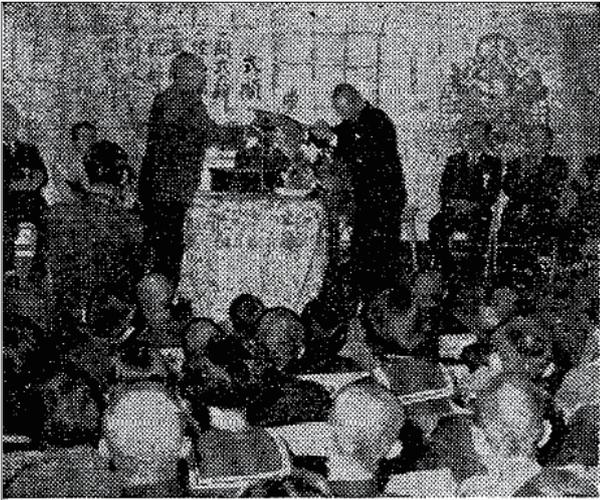
博物館一階の陳列室には「昔の貨幣と紙幣」「電気機関車」「ブラジルの大蛇皮」などの貴重な資料、標本約二十点をはじめ、一般参考品、児童生徒作品コンクールに入選した動植物標本数百点が陳列され、参観者に深い感銘を与えた。

なお、一般公開は来る十三日から行われるが、開館時間は毎朝十時からひる五時までとなっている。

博物館の運営と今後の見通しについて安村主事は次のように語った。「ペルー沖繩人協会の援助でようやく完成をみせ、その名も別名ペルー館としてあります。将来はブラジル在留同胞の協力をえて付属施

設として水族館を設けたい。三月までには高台一帯の墓地も整理され、博物館通りも完成する予定で利用者にとっては一層便利になることであろう。(原文)

写真3 子供博物館 開館式



写真提供：沖縄タイムス社1954年12月11日

●琉球新報 1954年12月11日付(夕刊)(抜粋)

話の卵「開館した子供博物館」

さる六月沖縄で子供たちのために始めて出来た子供博物館はいつ開館するかということはさっぱり見当もつかず、子供たちはせつかく立派に出来上つた子供博物館の建物をみていつ開館するのかと当のPTAにせがむしまつてであった。

その子供博物館が子供たちの夢を実現させて、きのうからやつと開館されたことは、当の子供たちもうれしいだろうが、われわれとしてもうれしいものである。戦後、いろいろの建物が各方面に建てられたが、こどものために、こどもたちが遊んだり楽しんだりするための建物は、戦後十年めに入ろうとする今ごろになつて出来上がった。これは大人として、子供の親として、むしろその遅いことを恥としなければならないことだが、遅まきながらも子供博物館ができ上り、開館の運びに至つたことは結構なことである。

沖縄で忘れられているものは何といても子供たちである。そのくせ口では“次代の国民”とか何とかうまいことをいいながら、何一つ子供たちのためにしてやれない大人たちには、口はばつたくてこどもの事に関して“次代の国民”などと言えた筋合の

ものではない、その証拠には唯一の子供パーク・遊園地新世界を見るかげもなく荒廃させた沖縄の大人たちである。今度の子供博物館にしる、ペルー在の同胞から贈られた資金がその殆どであつてみれば、ほんとうのところ、まだまだ大きなツラをしてこどもたちの前ではイばれる筋合のものではない。が子供博物館を計画しこれを建設したということでは沖縄PTA連合会もその資金を生かした施設として大ヒットである。しかし、問題はこれからだ。というのはその運営如何によつてこの博物館が子供のものになるか、PTAのための施設になるかということは今さら云々するまでもない。開館するに当たつてはPTA連合会でも結構なプランを実行して、今回の開館までもつて来たことでわかるが、今後子供博物館がりつぱになるか、お粗末なものになるかは、運営をするPTA連合会の責任というよりは、これを支援できるか、出来ないかという点で、むしろ一般の大人たちの責任である。子供博物館をより立派にするために、なお一層の社会の協力にあつてこそ健全な子供博物館になるものになると思う。(原文)

5. 子供博物館 展示出品目録(開館時)

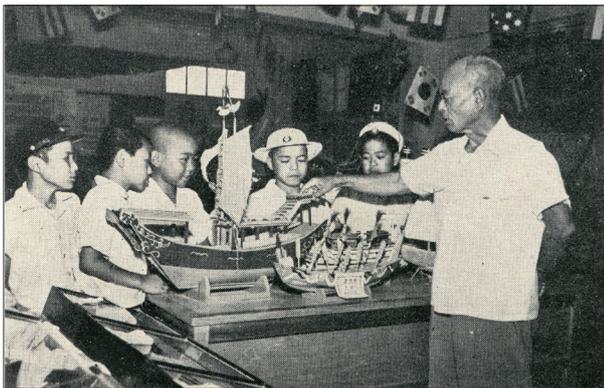
子供博物館は1954年12月10日に開館したことは先に述べた。開館時の状況を記録した資料が残っている。当時の沖縄PTA連合会(現：一般社団法人沖縄県PTA連合会)が編集した『全沖縄小学校選抜文集さざなみ第五号』及び『全沖縄中高校選抜文集紫雲第五號』である。両誌ともに「子供博物館開館記念特集號」と銘打ち1955年2月15日に発行した。子供博物館開会式に式辞を述べた天野鍛助氏による式辞をはじめ、ケニス・エム・ハークネス米国琉球民政府民間情報教育部学務課長が「琉球の友人諸君」と題して祝辞を贈り、比嘉秀平琉球政府行政主席、屋良朝苗沖縄教職員会長が祝辞を述べた。また開会式では小中高校生からも代表者を選出し祝辞を述べる機会を創出している。全沖縄高等学校生徒代表には首里高校の津野創一さん、全沖縄中学校生徒代表には那覇中学校2年生の高良政勝さん、全沖縄小学校生徒代表には開南小学校の吉田龍亮さんが行った。そして沖縄PTA連合会主事の安村良旦氏によって子供博物館建設経過報告が行われた。

両選抜文集には後半部分に子供博物館建設協力者

御芳名があり、続けて開館時の「展示会出品目録」が記録されている。児童生徒作品コンクール入選作品を筆頭に、一般住民からも資料の提供を受けたのであった。その総数は300件であった。(別表1)

出展資料は子供博物館にふさわしいものであり、小中高校生が制作した動植物の標本や地図、手芸作品、研究アルバム、電気関係機器、汽船模型、人体骨格模型などの力作が並んでいた。(写真4) 一般参考品としては、唐船模型など琉球王国時代を思い起こすようなものや動物たちの剥製、紅型や漆器などの工芸品、古武道のサイなどが記録されている。なかでも我喜屋ラジオ店が提供した「電気機関車」は、鉄道の無い状況もあってか、来館者の目を引き、展示資料のなかでも異彩を放っていたようである。

写真4 子供博物館 展示室



写真提供：沖縄タイムス社1954年頃

選抜文集にある出展目録の最後には、「子供博物館展示品の御願い」がある。

「皆様の学校での作品や、町に村に部落にある珍しいもので子供に見せたいものがありましたら子供博物館に展示させてください。貴重品は大切に保管いたします。御寄贈下さるものは永久に御名前を記録致します。バスで御届け困難なものは御知らせください。こちらから頂戴に参ります。」と広く資料提供の呼びかけをしている。続けて、現在の展示資料を紹介しながら、一般の方々には「昔の珍しい子供向きのもの、地方色豊かな立体的なもの、生きた動植物」などの例を示しながら「一品でも多く御出品下さる様御願い致します」とした。

同文集の裏表紙には、完成したばかりの子供博物館の写真に掲載し、積極的に利用するよう促してい

る。「▲社会科の勉強▲科学の研究▲一般貴重品の見学▲珍しい動物、植物の観察▲映画教室、二階ホール 特に最も新しいよい映画が見学できる 観察教育の殿堂 小中高校生の子供博物館 毎日＝午前十時開館・午後六時閉館 学校団体見学を歓迎します 修学旅行の予定に組んでください」と呼びかけた。

開館後、1960年頃に文部省（現：文部科学省）の社会教育官である高橋真照氏が子供博物館を訪れている。高橋氏は戦後復興期において社会教育制度の研究や女性教育、社会教育職員制度の検討などに関わっていた人物である。米国統治下の沖縄まで足を運び、来館したときの感想メッセージが沖縄県PTA連合会事務所に残されている。

沖縄にこんなに可愛い

子供博物館があるのを

知って 大変うれしく

おもいました。本土にすこし

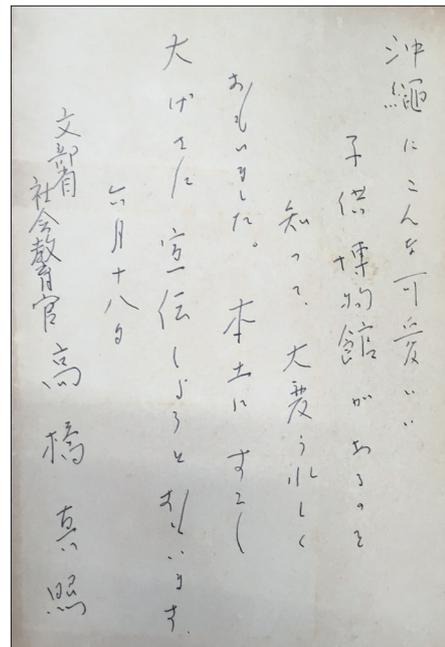
大きさに 宣伝しようとおもいます。

六月十八日

文部省

社会教育官 高橋真照

写真5 高橋真照氏メッセージ



沖縄県PTA連合会蔵

沖縄は戦争で焦土と化し、あらゆる面で日本本土に遅れをとっていた。沖縄は、行政や立法など日本本土とは分離され米国統治下にあり、日本の主権の及ばない地域であった。博物館や図書館、公民館、公園など整備が遅れていた沖縄において、地元の人々が資料を持ち寄り、海外からの資金を得て建設された「善意の塊」のような、子供たちの健全教育のためにある博物館に多くの人たちが感動した。

写真6 子供博物館と児童生徒たち



写真：沖縄県PTA連合会

また、放浪の画家として著名な山下清は、1960年4月20日に子供博物館を見学した。那覇市内で山下清展が開催されたためであり、11日間沖縄に滞在した。その間、首里の琉球政府立博物館など各地を訪れている。子供博物館では、動植物の剥製や標本に影響を受けたのか、三匹の魚のような絵がペンで、かわいく、そして勢いよく描かれている。(写真7)

写真7 山下清 ペン画



沖縄県PTA連合会蔵

## 6. 子供博物館の設計図

子供博物館の設計図は、沖縄県立博物館・美術館が所蔵している。(2003～2004年収蔵)

設計業務を担ったのは仲座久雄氏であった。仲座氏といえば、建築を専門としながらも戦前・戦後を通じて琉球文化の調査・研究・復元に関わり、琉球文化を体現する一人物として注目されている。戦前の1937年に守礼門の解体修理に関わり、戦後は「琉球文化財保護会」において常任委員を務めるなど、有形文化財、無形文化財、史蹟名勝、天然記念物など文化財全般の保存活動を行った。6)

他方では、戦後米国軍政府工務部において標準家屋(企画住宅)の設計と建設指導、厚生部では各地の病院診療所の建設、学校校舎の建設等、住民の生活基盤整備にも貢献した。また仲座氏が沖縄の織物から着想を得たという「プレカストコンクリート」いわゆる「花ブロック」は、近代的であり沖縄的であり風通しの良い洗練されたデザインの建築物を現出させた。7)

仲座氏は1949年に「HISAO NAKAZA ARCHITECT DRAWING OFFICE」を開設した。一時は沖縄群島政府の業務を担っていたが、退職後は1952年に「仲座久雄設計事務所」を再開した。1953年には首里博物館及びペルリ記念館を落成。翌年の1954年9月には子供博物館が完成した。

図面は11枚。1953年3月7日付の平面図及び立面図、断面図などであり、「児童博物館」の名称で記録されている。(写真8) その中には1955年の増築時の図面が4枚、1957年に花ブロックを施工した時の図面1枚が含まれている。

仲座氏は、沖縄民政府時代に米国軍政府の指揮の下で業務を請け負った経験から、米軍工事の施工技術を修得した。清々しく近代的なコンクリート建築の中に気候、風土、文化など沖縄の地域性を巧みに融合させている。子供博物館は、外観は洗練された四角いシンプルなものでありながら、その中に琉球・沖縄の自然、歴史、文化を継承し豊かな学びの場として誕生し、子供たちには“宝箱”のような施設だったのである。

## 7. おわりに

子供博物館が誕生したのは1954年12月である。そ

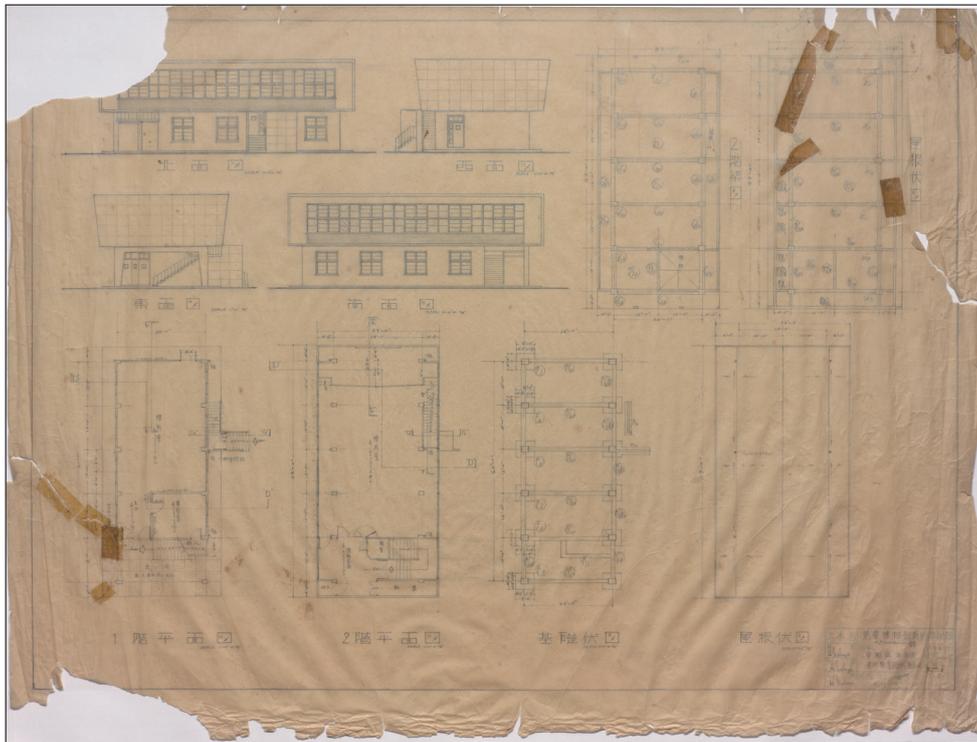
の前年1953年5月26日に首里博物館・ペルリ記念館落成式を行っている。設計は、どちらも仲座久雄が担当した。施工したのは首里博物館が金城田光氏が社長を務めた田光組であり、子供博物館は金城田助氏が社長の金城カンパニーだった。首里博物館は1952年に着工したが、壁に使う煉瓦や屋根の赤瓦などの資材は不足していて、博物館職員も資材の調達に奔走するほどであった。資材不足に資金不足で建設は遅れていたが、ペルリ記念館の併設を理由に米国民政府が博物館建設を援助したため完成へとたどり着いた。そして収蔵品は、沖縄内外から寄贈や収集、購入などにより充実させていったのである。子供博物館も首里博物館も完成にいたるまでに苦労した経緯に共通点がある。戦後復興もままならない時代に、博物館を創っていくという先人たちの意欲には感嘆するばかりである。残念ながら、首里博物館も施設として現存していないが、その理念と活動方針（もちろん収蔵資料）は、沖縄県立博物館・美術館に受け継がれている。これからも社会教育施設そして文化施設として、沖縄の自然・歴史・文化等を発信し、その優位性を発揮した研究活動を行い、県

民に親しまれる博物館づくりに努めていくのである。

参考文献

- 1) 『子供博物館の建設を省みて』 安村良旦1954年 沖縄PTA連合会
- 2) 『沖縄の「子育て・教育への共同的営み」を形作る歴史・文化・人々―「子育て・教育の共同的営み」としてのアロマザリングとPTA―』 神野潔他2017年
- 3) 『誰が移民を送り出したのか―環太平洋における日本人の国際移動・概観―』 坂口満宏2010年 立命館言語文化研究21巻4号
- 4) 『ペルーにおける沖縄県出身自由移民の都市集中と職業構成の変遷』 石川友紀、米盛徳市1984年 琉球大学法文学部紀要
- 5) 『社説ペルー移住110周年先人を誇り絆強めたい』 2016年8月31日 沖縄タイムス
- 6) 『仲座久雄 その文化財保護活動1936～1962』 2004年 仲座巖
- 7) 『仲座久雄による「プレカストコンクリート」の考案と展開』 2021年 仲座巖

写真8 児童博物館ペルー館新築工事設計図面（平面図 立面図 梁伏図 基礎伏 屋根伏）  
1953年3月3日付



沖縄県立博物館・美術館蔵

【別表】 子供博物館 展示出品目録（開館日現在）※ 1954年12月11日

1	児童生徒作品コンクール		57
	※小学生の部		17
	1 貝殻標本	開南小6年 我喜屋江美子など	6件
	2 昆虫標本	城岳小6年 玉那覇有清など	6件
	3 植物標本	大道小6年 金城百合子など	2件
	4 工作の部 鉱石ラジオと船	大道小6年 漢那 毅など	1件
	5 社会科の部 日本地図など	久茂地小6年 我部正信など	2件
	※中学生の部		40
	1 貝殻標本	那覇中1年 島袋トモ子など	10件
	2 昆虫標本	那覇中1年 松田敏子など	6件
	3 植物標本	上山中2年 新城幸子など	3件
	4 動物標本	胡差中3年 仲里武司など	2件
	5 工作品	唐しし	6件
		那覇中3年 島袋秀雄など	
	6 社会科	日本地図	3件
		那覇中2年 城田百合子など	
	7 研究作品	世界貿易図	10件
		那覇中2年 川上善市など	
2	参考品 高等学校出品		63
	1 昆虫標本	那覇高1年 黒島安之など	31件
	2 植物標本	石川高3年 石川吉男など	8件
	3 貝殻標本	読谷高1年 金城清子など	4件
	4 動物標本	前原高3年 濱門 進など	3件
	5 工作其の他 電蓄など	工業高2年 岸本政晃など	9件
	6 学校出品 人体骨格模型など	楚辺小、玉城中、知念高など	8件
3	一般参考品		86
	唐船模型	真和志市與儀区 安次富長達	1件
	運搬船模型	真和志市與儀区 安次富長達	1件
	爬龍船模型	真和志市與儀区 安次富長達	1件
	ブラジル産茶盆	真和志市 宇根 良治	2件
	琉球政府模型	民政府 民間情報教育部	1件
	大海亀標本	首里 具志堅宗精	1件
	いせえび標本	真和志市安里 具志堅有春	2件
	青海亀標本	真和志市安里 具志堅有春	1件
	タイマイ標本	真和志市安里 具志堅有春	1件
	はし太からす標本	真和志市安里 具志堅有春	1件
	たか 剥製	真和志市安里 具志堅有春	3件
	山羊 剥製	真和志市安里 具志堅有春	1件
	はと 剥製	真和志市安里 具志堅有春	1件
	電線類見本	政府 工務交通局資材課	16件
	通信電製作工程表	政府 工務交通局資材課	1件

	鉄塔模型	政府	工務交通局資材課	2件
	電話模型	政府	工務交通局資材課	1件
	人形ガラス 箱入	首里	西平 守模	1件
	南洋浮彫額	首里	西平 守模	1件
	鯨の骨	馬天	水産研究所	2件
	那覇丸進水用 斧と台	那覇	琉球海運株式会社	2件
	那覇丸進水用 写真	那覇	琉球海運株式会社	2件
	気象台用器具類	天久	琉球気象台	29件
	塗物工程早わかり	那覇	紅 房	12件
4	寄附展示品及び備品			94
	1 動物類			
	琉球いのしし	名護地区PTA会長	比嘉松栄	1件
	フィリピンさる	廣瀬産業監督	H・W/WHLEY	1件
	琉球大こうもり	真和志市安里	具志堅有春	1件
	まんぐうす	真和志市安里	具志堅有春	2件
	八重山箱亀	真和志市安里	具志堅有春	2件
	はと	名護地区 PTA	教職員会	2件
	金魚	平安名朝康		1件
	斗魚	首里中学校		2件
	国頭山亀	天野鍛助		2件
	目白・ひよ鳥・つぐみ	安村良旦		22件
	2 模型標本類			
	漁業模型	琉球水産株式会社		1件
	くり船模型	沖縄タイムス社		1件
	はし太からす	文教図書	中村善忠	1件
	琉球産鉱石標本	経済局鉱工課		1件
	紅型標本	琉球紅型技術振興会		1件
	3 貴重品類、その他			
	昔の貨幣と紙幣	琉球銀行本店		2件
	琉球切手類	工交局郵務課		1件
	電気機関車	我喜屋ラジオ店		1件
	ブラジルの大蛇の皮	真和志	宇根良治	1件
	久志のはいし松	経済局林務課		1件
	古武術、さい	那覇市平安名寛行		1件
	真空管のいろいろ	中央電話局		1件
	テープ通信写真	工交局資材課		1件
	農業薬品類	琉球農業組合連合会		16件
	農業肥料類	琉球農業組合連合会		7件
	尾長鶏模型	教職員会	屋良朝苗 喜屋武真栄	1件
	電線見本	沖縄配電株式会社		5件
	鹿の骨、ケラマ産	文教局	玉城芳雄	1件
	かんのん竹	名護地区 PTA		1件

額入色紙	PTA 連 川崎信志	1 件	
ひょたん	上原徳太郎	1 件	
博多人形	知念正永	1 件	
七福神人形	嘉手苺春子	1 件	
水汲牛車	兼島信子	1 件	
犬の置物	兼島 信子	1 件	
4 備品類			
映写用スクリーン	オリオン興行株式会社	1 件	
展示用棚	古堅兄弟社	4 件	
展示用板	久高材木店	2 件	
		300件	300

「全沖縄小学校選抜文集さざなみ第 5 号」（1954 年沖縄 PTA 連合会）より抜粋